

日本とアラブの交流史

—両者の相互理解に関する一試論—

Hassan Kamel

キーワード アラブから見た日本 日露戦争 日本から見たアラブ 日本
の敗戦と高度経済成長 70年代のオイルショックと日亜関係

はじめに

これまでの日本とアラブ・イスラム世界とのかかわりの歴史を振り返ると、それが概して間接的な関係であったこと、したがって、両者の間には必ず媒介役を演ずる別の存在があったことがわかる。例えば、古くは中国がその役割を演じてきたし、その後、日本人がエジプトを含むアラブ・イスラム世界のことを知る契機は、西からやってきたポルトガル人宣教師などを通じてであったといわれている。しかもつい最近まで日本とアラブ・イスラム世界の間には直接的な関係がなく、もっぱら西洋のレンズを通してお互いの姿を眺めようとしたという事実もある。お互いのことを知るのに西洋のメディアに頼ってきた結果、日本の場合は、西洋の人々が理解したままのアラブ、言い換えれば、彼らが日本人に与えたいと考えるアラブ世界のイメージをそのまま無批判に受け入れるようになり、一方、アラブ世界もまた、西洋というフィルターを通してゆがんだ日本観を抱くようになったのである。したがって、たとえ西洋というフィルターを通して正しい情報を得ることができたとしても、どれも表面的なものにとどまり、両者の相互理解を深めるのに、ほとんど役に立たないものである。こうした中、お互いの本当の姿が見えないまま、21世紀を迎えることになったのである。

アラブで日本というと、まず浮かんでくるイメージはGeisha・Kimono・Samuraiなどである。一方日本人がアラブということばですぐに思い浮かべるイメージは、ラクダ・砂漠・イスラムといったあたりに限定される。

日本人のアラブに対する一般の関心が非常に低いということは、筆者自身が留学生として日本に滞在して感じたことの一つである。テレビのニュースや新聞でも、通常、アラブのことを取り上げたものはほとんどと言っていいほど見あたらない。ところが、何か大きな事件が起こると、テレビ局がその事件のこ

とを大げさに報道しようとする。これでは普通の日本人がアラブ・イスラム世界についてマイナスのイメージを抱いたとしても無理のないことである。それゆえ、これまでの日本人のアラブへのアプローチとアラブ人としての日本へのアプローチの仕方を考え直す必要性が迫ってきているものと思われる。

本稿では、近現代における日本・アラブ関係を現在の視点から改めて検討し、両者が互いに相手に取り組むに当たって、現代世界の新しい動向や諸条件に適した対処法を見出すことをその目的とする。そのために両者が互いに抱く先入観や誤解の理由を検討するとともに、総合的な相互理解ができるために必要な条件を考えてみたいと思う。

アラブにおける日本認識とイメージ

アラブ・イスラム世界における日本社会の紹介と認識が日本でのそれよりやや遅れて始まったことは疑いのない事実である。それまでの日本はシナの一部だと思われていたのに対し、今度はシナの東にあり、黄金を産する「倭国」、「ワーク・ワーク」という極東の小さな島というふう認識されるようになった。しかし近代アラブの日本認識に大きな影響を与えた出来事の一つとして日露戦争での日本の勝利があげられる。日露戦争の日本の勝利によってそれまでは低調であった日本に対するアラブの関心が一気に高まり、従来西欧諸国に向けられていたアラブの視線が極東の奥のほうにまで向けられるようになったのである。当時アラブ・イスラム世界はオスマントルコという大きな傘の下にまとまり一つの強力な帝国になっていたが、宿敵の帝政ロシアだけにはなかなか勝てなかった。そこでいきなり極東の小さな島国日本がバルチック艦隊を破ると、自分たちが勝てなかった帝政ロシアを破ってくれた国はどんな国であるかという関心が寄せられるようになった。こうしてアラブの人々は憧れと尊敬の気持ちで日本を見るようになり、そのプラスイメージが定着するに至ったのである。こうして、その後も、例えば真珠湾攻撃、長崎と広島原爆投下および敗戦後の高度経済成長などによってその関心や憧れがますます深まっていったと思われる。

日露戦争直後のアラブ・イスラム世界では、西欧列強による植民地政策が始まっていた。その代表的な例として、1882年から始まったイギリスのエジプト支配があげられる。イギリスの支配下に置かれたアラブの数多くの民族運動の指導者たちは、アラブの宿敵「帝政ロシア」を破った日本をモデルにすることによって、祖国の独立を図ろうとしたのである。

まずエジプトの民族運動の指導者ムスタファー・カーミル（1874—1908）が日本の躍進ぶりを教訓とし、『昇る太陽』AL-Shams al Mushriqa（1904）という日本紹介書を発表した。ムスタファー・カーミルのこの著作と数多くの雑誌に掲載された記事は当時の知識人だけではなく、一般大衆の間でもたいへん人気があったことから、数多くのアラブ人が日本の紹介書を読んで、日本に憧れるようになったことは言うまでもない。

その次に同じ目的でつまりエジプトの独立という大きな目標のためにナイルの詩人と呼ばれるエジプトの国民詩人ハーフィズ・イブラーヒムが『日本の乙女』と『日露戦争』という二つの作品を発表した。これらは、学校の教科書にも採用され、今日でも愛唱されつつあることから、アラブにおける日本への憧れの気持ちを決定するのにたいへん効果的であったことがわかる。

アラブにおける日本認識に大きな影響を与えた二つ目の出来事は、1923年の関東大震災である。上記で取り上げた文学作品を通じて日本への親しみと憧れがすでに出来上がっていたため、関東大震災のニュースがアラブ世界で流れた際の人びとの驚きと悲しみは非常に深いものであったことは言うまでもない。そこでエジプトの詩人アハマド・シャウキー（1886—1932）が『日本の地震』というタイトルの詩の中でその出来事に対するアラブ人の気持ちを描写した。

その後日本のことをテーマにしたもう一つの文学作品はエジプトの代表的劇作家タウフィーク・アルーハキーム（1898—1987）によって発表されるようになった。『洞窟の人々』という戯曲の中では、日本の浦島伝説からヒントを得て、たとえイギリスの支配が長引いてもエジプトの現代社会への復活は決して難しいことではないということを描写している。独立を願う民族指導者の文学作品はなぜみんな日本のことを取り上げてモデルにしようとしたかと考えた時に、次のようなことがわかるであろう。

日本とアラブ・イスラム世界のかかわり方と西洋とアラブのそれを比較した場合、西洋とアラブの長い交流の間に、戦争がたくさんあったことがわかる。12世紀の時にまずアラブがイベリア半島を植民地にした。そのことを恨みに思った西洋人が十字軍の際にアラブに復讐することができたといわれている。そこから両者間の敵対関係が生まれ、その後の出来事、例えば、19世紀における西欧列強のアラブ・イスラム世界の植民地化運動によって両者間の溝が深まるに至った。一方日本とアラブの交流は18世紀半ば頃まできわめて間接的なもので、西洋のように真正面からぶつかるような場面がなかったため、敵対感がなく、かえって、憧れるようになったのであろう。そこで西洋の支配から独立することを願おうとする際に、常に日本のことをモデルにして民族運動の指導者が国民にプレッシャーをかけようとしたのではないかと思われる。日本の勝

利や躍進ぶりを喜ぶ気持ちは、日本がいくら強くなっても祖国はそれに飲み込まれることがなく、かえって祖国に居座っているその敵を倒してくれることにつながるのではないかという期待から発するものである。

両大戦間にアラブ・イスラム世界における日本認識に大きな影響を与えたもう一つの出来事があった。当時エジプト人の間では、民族運動の精神が非常に高まっていたため、イギリス商品へのボイコット運動が続いていた。そういったタイミングの良い時期に、日本商品がエジプトを含むアラブ・イスラム世界に入っていくと、ヨーロッパからの商品と競争ができるようになり、その後のアラブにおける「Made in Japan Complex」ができるに到った。後に詳しく述べることになるが、両大戦間にアラブ世界に進出した日本の商品が徐々に高い人気を博するようになり、70年代までに一般大衆のレベルでは、エレクトロニクス製品や自動車といった市中に氾濫する日本製品が日本認識に大きな役割を果たしたといった面がある。

そしてこれに意味を与えたもう一つの出来事として、1926年に日本政府がアレキサンドリアに総領事館を開設するとともに、その後カイロに公使館を設けたことである。

太平洋戦争のはじめ頃にマレー沖で日本海軍の攻撃を受けて沈没したイギリスのプリンス・オブ・ウェールズやレパレスについての報道を受けたエジプト人はカイロなどの大都市でそれに対する喜びを表わすために行列を行った。その翌日にイギリス大使館がそうした反応に対する批判文を出した。当時エジプトや他のアラブ諸国はイギリスやフランスの支配下に置かれながら、独立の夢を見ていた。そのため、第二次世界大戦が勃発した際、イギリスの支配下で苦しむエジプト人の数多くの知識人にとって、日本の勝利への期待はきわめて大きいものであった。日本を含む枢軸国がイギリスを含む連合国を破れば、祖国の独立へつながるという見方をするアラブの民族運動の指導者も少なくなかったであろう。そのため、戦争中アラブ人の視線は日本に向けられるようになり、戦争に関する報道を受けながら、日本の動きを見守っていたのである。数多くのアラブの人が首を長くして、極東の奥の方から何か良い知らせが来るのを待っていた。そして日本軍の新しい動きと戦争の進展を新聞や雑誌の記事で知ることができた。そのことから日本への認識が深まったことは言うまでもない事実である。日本がイギリスを破れば、自分たちの解放につながる。それがきっかけで日本はどんな国であるかとか、日本人のライフスタイルやウエイオブシンキングに興味を持つことになった。それに答えるような形でいくつかの雑誌の編集者が日本に関する記事を出版したりもした。例えば氏神としての日本の天皇制に関する紹介記事が出され、日本の着物や日本の食文化を紹介する

ものもあった。

このようにイギリスの支配下に置かれて独立と解放を願うエジプト国民から日本に寄せられる期待は非常に大きいものであった。そのために日本の敗戦におけるショックも大変大きかった。そして最後にエジプトを含むアラブ・イスラム世界の人々に衝撃を与えたのは何と言っても原爆によるナガサキとヒロシマの惨劇であった。それに寄せられる人々の悲しみと驚きは非常に大きかったものである。

当時アラブ・イスラム世界の新聞や雑誌は日本の敗戦に関するニュースであふれていた。まず1946年の5月26日の『Musamarat el-gaib誌』という当時アラブ世界の知識人の間でよく読まれていた雑誌が日本の敗戦の理由を説いて、「なぜ負けたか!」というタイトルで発表された日本海軍の野村大将の記事にアラビア語訳をつけてアラブの人々に紹介した。

同年の10月20日に同じく『Musamarat el-gaib誌』に戦後日本に関するもう一つの記事が発表された。先述した記事と違って、戦後日本の現状、社会構造・占領軍の行動・戦争からのダメージと復興運動・占領軍が新しく設けた飲み屋やナイトクラブのようなどころなどを取り上げ敗戦後における厳しい状況をアラブ社会に紹介した。

戦後つまり1950年代になると、アラブ・イスラム世界ではさまざまな動きがあった。まずエジプト人がずっと前から期待してきたイギリスからの独立という国家の目標が達成されたし、エジプトの初代大統領ナセルによる革命があった。その後スエズ運河の国有化とそれに伴うスエズ動乱（第二次中東戦争）も勃発した。そしてイラク革命という動きもあった。その時期における日本および日本人の国家目標は産業貿易立国であったため、アラブ地域との関係がその目標に沿って再開されるようになった。1952年11月、エジプトとの外交関係を再開し、同年12月カイロに公使館を開設し、翌年の4月に大使館に昇格させた。

その後60年代には日本の高度経済成長があって、日本の企業・日本製の商品が進出し高い評価を得るようになった。当時運の良い事にアラブ世界では、民族運動の精神が依然として高かったし、イギリスやアメリカがアラブ・イスラエル紛争に対して批判的な見方を示したため、欧米諸国からの商品のボイコットが続いた。そこで戦前からアラブ諸国で高い人気を占めていた日本製の商品が再びアラブ世界の市場に流入することになった。70年から80年にかけて日本からのエレクトロニクス製品、自動車などがエジプトを含むアラブ世界でナンバーワンという地位を占めるようになった。このようにしてエジプトや他のアラブの人々が子どもの時から日本製の商品に囲まれて育っていくため、このようなハイテク製品を作る日本人や日本に馴染みがあるし、日本に興味を持つの

は当然のことである。日本製品は非常に性能が良く、長持ちするため、アラブ人にMade in Japan Complexができてしまい、他のものを信用しないような傾向がある。最近日本の大きなメーカーがそのことに気が付いて、現地に製造工場を開設するようになった。例えば東芝などの例があげられる。それ以外にも2000年にトヨタ自動車がカイロ郊外にある工業都市に現地生産の工場を設けたという発表があった。それに引き続き日産自動車も来年（2005年）にカイロに生産工場を設けるようになると発表した。そのため、日本とアラブの交流における日本製品が演ずる喜ばしい役はこれからも期待されるものであろう。

ナセルのエジプト革命があって、エジプトは王制から共和国制に変わっても、日本に憧れる気持ちはほとんど変わらなかった。1957年3月20日にエジプトは日本と文化交流協定を結んだため、両国間の人物交流などが活発化した。そして1960年代にカイロ郊外のヘルワンに日本庭園が築かれ、筆者と同じ世代の者が子どもの時、冬休みになると、必ず修学旅行でそこにつれて行ってもらったことがある。現在でもその庭園がきれいに残っていて、小学校の生徒などが必ず見学に行くところの一つである。そのことを表わすもう一つの例は、当時エジプトとシリアから構成されたアラブ連合の政策の基盤となっていた国憲に日本の発展について言及した一節があったし、1964年にエジプトの初代大統領ナセルがアレキサンドリアで「日本に学ぶべし」と演説した。日本とエジプトはほぼ同時期に近代化に踏み出したことはエジプト人なら誰でも知っていることである。エジプトはイギリスの植民地になったことから近代社会について行くことがしばらくできなかつたが、頑張れば日本のようになれるのではないかとナセルが国民の愛国心を起こそうとしたと思われる。

70年代になると、エジプトにおける日本認識が具体的なものになった。1974年にカイロ大学文学部に日本語・日本文学科が新設され、国際交流基金より4名の日本人講師が派遣されるようになった。それがアラブ諸国での最初の日本語学科であり、その後のエジプトを含むアラブ地域における日本認識と日本研究に大きな影響を与えた出来事の一つとなった。1978年に第一期生が卒業し、優秀な学生が日本文部省から奨学金をもらい、日本の大学院に進学し学位を修得した。帰国後彼らは同学科の教員を勤め大きな役割を果たすようになったのである。毎年18人ていどの人が卒業し、日本とエジプトの掛け橋となって、相互理解が深まるに到ったと思われる。例えば、70年代後半から始まった日本人観光客のエジプトへの団体ツアーの通訳とエジプトにある日本の商社マンと地元の人との間の通訳などがあげられる。それ以外にも日本語学科の先生たちによる、一般人向けの日本文化紹介と日本の文学作品のアラビア語への翻訳もあげられる。つい最近現れた日本文学作品のアラビア語訳は2001年に国際交流基

金と日本文学科の協力によってできるようになった日本文学の代表的な作品『源氏物語』のアラビア語版である。これにより数多くのアラブ人が日本文学の優れた作品を知ることができたし、違った目で日本を眺めるようになったと思われる。

90年代後半になると、日本語を習いたい人の数が急速に増えるようになり、カイロ大学日本語学科では、一学年では20名以内という定員があるため、学習者のニーズに応えることができなくて、2001年にカイロ大学に次ぐエジプトでは二番目に規模が大きく優秀な学生が集まることで有名なアイン・シャムス大学に日本語学科が新設されるようになったのである。

現在でも日本に興味を持って日本語を習いたいというアラブ人学習者の人数が増えつつある。そのことはエジプトに限ったことではなく、アラブ世界どこでもそうである。そのため、エジプト以外の国のいくつかの大学で日本語・日本文学科が国際交流基金によって新設されるようになった。例えば、サウジ・アラビアのキング・サウド大学に日本語学科が新しく設けられたし、シリアのダマスкас大学でもシリアの大学生に日本語・日本文学を教えるため、同じく日本語学科が国際交流基金によって設置されたのである。このようにいくつかのアラブの国で新しく設置された日本語学科で数多くのアラブの大学生が日本語を学び、日本語がしゃべれるアラブ人も以前のように珍しいものではなくなったのである。しかも日本語がしゃべれるアラブの政治家さえも現れるようになったのである。それによって両者間の相互理解が深まるようになったことは言うまでもない事実である。

在カイロ日本大使館の文化センターもエジプトにおける日本文化の紹介と日本語の普及に大きな役割を果たしてきたと思われる。一般人向けの日本語講座を定期的に行い、そこでさまざまな分野で働く専門家や社会人および大学生などが日本語を学ぶことができるようになったのである。しかも日本文化紹介の一つの活動として、毎週水曜日に日本で大ヒットした映画を紹介するという企画があって、現代日本をエジプト人に理解させるのに、とても好都合なものとなっている。筆者自身も在カイロ日本大使館の文化センターで行われた日本文化紹介の集いや映画鑑賞会に参加したことがあった。そこで上映された日本の映画で大変人気があったのは、70年代から90年代の間に日本で大ヒットした山田洋次監督の「男はつらいよ」のシリーズである。日本の地理や自然環境などをエジプト人に紹介するのに大変良い機会となり、そこで日本に興味を持って、日本語を学ぼうと思った人が現れたこともいうまでもない。

80年代になると、それまでの努力が実って両者の関係が徐々に深まるようになった。1983年4月にムバラク大統領が国賓として、エジプトの国家元首とし

ては初めて訪日したが、このことによって両国の関係がいつそう緊密なものとなった。両国の間には、ムバラク大統領訪日の際合意された合同委員会が設置されて、国際情勢、二国関係全般に関する意見交換の場が設けられるようになった。同委員会とは別に、国会議員を始めとして両国要人の往来が活発に行われ、様々なレベルでの意見交換が行われるようになった。

ムバラク大統領が日本を訪れ、日本への関心が徐々に高まるようになったことと平行して、日本がエジプトに重点的な経済援助を与えるようになり、無償供与で小児科病院を建設した。その病院はカイロ市民の間では、評判が良く、カイロ郊外や地方出身の人でもわざわざカイロまで出向いて、Japanese Hospitalの医師に病気になった子どもを見てもらおうとする。この病院にはアラビア語の名が付いているにも関わらず、誰もその名前を呼ばず、日本の病院と呼んでいることからわかるように、日本の評判がとても良いのである。

そのほか、同じ80年代に日本政府の援助協力によって、カイロでは、新しいオペラハウスが建設され、オープニング・セレモニーに際して日本の花火が初めてカイロの空に打ち上げられたし、日本の歌手、岩崎宏美さんがギザのピラミッドとスフィンクスをバックに初めて日本の歌をアラブ人の前で歌ったのである。それはJapanese Festivalと呼ばれて、未だにエジプト人の記憶に残っている。日本語で歌われている歌の内容まではわからないにしても、観客席にいる大勢の人たちが一緒になって歌ったりすることもあった。Japanese festivalが終わった後、NHKで岩崎宏美さんにその感想を聞いた時、砂漠だと思いながら、行って見たが、いざとなって舞台上に立って歌ってみると、すごい人数の人が集まってきた。それまでにその人たちはどこにいたか！どこから沸いてきたか良くわからないが、とにかくすごい数の人だったと彼女は述べたのであった。その出来事は両国間の関係が深まるのにとっても都合の良い機会であって、以前からエジプト人が日本について抱いていた良いイメージをいつそう強いものにしたと思われる。

80年代から90年代にかけてドラマや映画が日本とアラブ・イスラム世界の相互理解に大きな役割を果たしてきたと思われる。その代表的なものはNHKのドラマシリーズ「おしん」である。80年代後半にエジプト国営テレビ2チャンネルで放送されたNHKの連続ドラマ「おしん」がなぜかエジプト人のあいだで大人気を博していた。放送時間になると、子どもから大人まで家族全員が集まって、テレビの前でドラマが始まるのを待つ。昔日本で「君の名は」というラジオ番組が放送された時と同様に大人気で、みんなテレビに齧り付きながら、見ていたという。再放送の際にも、同じぐらいの人気が出たし、つい最近でももう一度放送するようにと視聴者からの要求があったとテレビ局による発表が

あったと言う。「おしん」を見ている最中に女の子の子どもに恵まれた家族がその子にオシンという名前を付けようとしたが、前例がないという理由で市役所に断られたが、どうしてもオシンという名前にしたいと言ってそのことを裁判で訴えたという新聞記事があった。「おしん」の放送があった90年代では、エジプトにおける日本ブームが起きたことも事実である。「おしん」に憧れて日本人の奥さんをもらおうとするエジプト人男性がたくさんいたし、「おしん」がきっかけで日本語を学ぼうと思った人もたくさんいるのである。日本人との国際結婚はそれまでに少数ケースであったのに、「おしん」の放送があった90年代に圧倒的に日本人との国際結婚が増えたと言われているし、また日本について知りたいというエジプト人が現れるようになった。そこでカイロ大学の日本文学科と在カイロ日本大使館の文化センターが日本についての知識を得るための唯一の窓口となった。そして「おしん」の放送を契機に、対日関心が非常に高まり、様々な日本紹介記事、ニュースなどが取り上げられるようになった。一般大衆における「おしん」の印象がどれだけ強いものであったかということを知る一例として、エジプト南部の子どもの例があげられる。エジプト南部のアスワンやルクソルを訪れた日本人観光客の感想文をインターネットサイトで見ると、アスワンに行って、観光地を歩いていると、現地の子どものオシンだと呼ばれて驚いたという体験談を読むことができる。そこからわかるように、エジプトの子どもから見て、日本人というと、みんなオシンである。オシンによってエジプト人に与えられたイメージはまたプラス的なものであったため、戦前から出来上がっていた日本への「片思い」をいっそう強いものにしたと思われる。本当に国際関係や国際交流はドラマ一つで変わるものであることがその例からもわかるであろう。

「おしん」に影響を受けてエジプトの俳優モハメド・ソボヒーが「Aalat Wanis ワニース一家」という連続テレビドラマの中で日本のことを取り上げ日本の日常生活や習慣を視聴者に紹介した。その内容はワニースの長男が日本人女性と文通していて、彼女がエジプトを訪れる際、彼の家でホームステイをする。そこで彼女はエジプト人の普通の家族のライフスタイルを知ることができたとし、反対に日本のライフスタイルや衣食住といった文化をその家族の人に紹介していくというストーリーになっている。文通で知り合った日本人の役を演じたのはカイロ在留邦人の女性でドラマの中でオシンという名前だった。モハメド・ソボヒーは国民俳優の一人で彼のドラマは常に視聴者の間で大人気を集め、彼らに何らかのメッセージを与えていたことから、どれだけこのドラマによって両者の相互理解が深まったかわかるであろう。

「おしん」以外に大きな役割を果たしてきたテレビ番組というと、日本のアニ

メがあげられる。70年代初頭から90年代後半に数多くの日本のアニメ作品がエジプトをはじめとするアラブ諸国で放送されるようになり、アラブ世界全体の子どもをあいだで、高い評価を集めていた。どのアニメ番組も、すべての登場人物がアラビア語でしゃべる吹き替えになっているが、そこに出てくる風景や地名などは日本のものだし、ストーリー自体が日本の社会環境や文化と何らかの形で関わっていることから、子どもレベルでの日本理解に役立ったことはいうまでもない。その代表的なものはまず1980年にイラクやエジプトの国営テレビで上映された日本のアニメの連続テレビ番組「シンドバッドの冒険」である。エジプトやイラクばかりではなくアラブ諸国の子どもに絶大な人気を集めた。その後、同じくイラクやクウェート・エジプトなどで「サスケ」という日本のアニメが上映されて、高い人気を集めていた。子どもがどこかの観光地で日本人を見ると、必ず「サスケ」と呼んでいたこともあった。しかしそれまでアラブ世界で放映された日本のアニメの連続テレビ番組でどれよりも高い人気を集めたのは、やはり90年代にエジプトや他のアラブ諸国で放映された「キャプテン・翼」というサッカーアニメであった。もちろんそのアニメもアラビア語に吹き替えられて、アラブ名「キャプテン・マゲッド」という名前になったが、90年代に日本で起きたサッカーブームのことや、日本の学校の仕組みとか、人間関係をアラブの子どもたちに間接的に理解させたことは間違いないところであろう。

このようにテレビ番組やドラマというのは日本とアラブ諸国の相互理解が深まるためにとても喜ばしいものであるし、このような番組が日本とアラブ諸国の間でもっと行われるようになったら、素晴らしい文化のダイレクトメールになるものと思われる。

戦後日本のアラブ認識とアラブ研究

戦前におけるアラブ・イスラム研究は当時日本の軍事政府の政治的または経済的政策と深いかかわりを持って現れたため、第二次世界大戦における日本の敗北がこれらの研究に想像以上のダメージを与えた。

第二次世界大戦、太平洋戦争における日本の敗北は1945年8月14日に行なわれた「御前会議」で発表されたポツダム宣言の受諾によって明らかになった。それに伴って、軍国政府や軍隊の解体および「民主主義国家」、経済復興、産業貿易立国を築き上げることは当時の国および国民の大きな目標と課題であった。これらのことを前提とする国際社会への復帰という難しい状況の中で国立およ

び民間の研究所が解体され、日本でのアラビア語研究は個人的な動きに残されるのみとなった。その後、確かにアラブ地域で次々と現れた民族運動は1950年代から日本のメディアで大きく取り上げられ、論評されたが、戦後日本がアラブ地域に対して直接の加害者ではなかったため、それらの研究にマイナスの点が見られたしアラブ問題は再び間接的な存在のように思われるようになった。

次に戦後日本の時期を三つの転換期に分けてその中で日本におけるアラブ・イスラム研究の動向を考えてみよう。

まず戦後日本史における最初の転換期は1950年前後に現われ、その時期における日本および日本人の国家目標は産業貿易立国であったため、アラブ地域との関係がその目標に沿って再開されるようになった。その政策の中では、当時アラブ地域で次々と現れた民族運動などはむしろ日本の目標の不安定要因として見られ、日本の産業貿易立国にとって阻害要因と見られる傾向があった。そこでは常にアラブ世界での政治社会的変動への警戒が必要だった。このようなアラブ世界における激しい変動とそれに伴う経済的重要性の増大は戦後日本における調査研究機関設立の最初の引き金となった。こうして中東調査会、アジア経済研究所、ジェトロなどの研究所が新設され、それに政府財界の積極的な参加も見られるようになった。中東調査会は日本外務省によって1956年に新設され、中東地域における政治的な諸問題を取り上げて分析した。アジア経済研究所は1958年に通産省によって設立され、東アジアおよび中東地域並びに発展途上国の経済的な諸問題に注目した。

しかしこの時期のアラブ・イスラム研究においては、個人的な努力が何よりも活発でこの時期の特殊な色合いを定める一つの明白なファクターであった。つまり戦前期におけるアラブ研究への投資が収穫につながり、現地留学および大阪外国語学校でアラビア語を身につけた人たちが何らかの形でそれらの研究に貢献するようになった。

そして敗戦とともに解体された諸研究所に所属していた何人かのアラビア語の研究者が引き続きアラビア語の研究に努め、各地の大学のスタッフとなって行った。

例えば、南満州鉄道会社によって設立された回教圏研究所に所属していた前嶋信次氏が慶應大学のスタッフとなった。彼はイスラム史の先駆者として知られるが、同大学にイスラム史研究科を設立し、いくつかの作品をアラビア語原文から日本語に直訳した。彼によって出版されたアラビアンナイト（千夜一夜物語）の日本語版は日本でのアラブ認識およびアラブ世界のイメージの定着に大きな影響を与えた。その後、彼によってアラブの地理学者（イブヌ・バトウター）の旅行日記およびアラブの詩人（al-jahiz）のkitab al-bukhalaの日本語版

が刊行された。同じく慶應大学の井筒俊彦氏がイスラム思想に注目し、1957年にアラビア語原文からの直訳で最初の日本語版のコーランを三巻本で日本に紹介した。そして彼の次の作品である *God and Man in the Koran* が長年にわたって、その分野のユニークな参考文献として知られるようになった。

日本の戦後時代における第二の転換期は1960年前後であった。60年代になるとアラブ地域における民族運動と社会主義政策が活発に行なわれ、イギリスやフランスの統治下に置かれていたアラブ諸国が次々と独立への道を進んでいった。その民族運動の主導権を握って国民を引っ張っていたアラブ指導者の多くが軍隊出身の人たちであったので、彼らに対し欧米諸国が根強い不信と不安を抱くようになった。また、当時アラブ諸国に対する日本の政策姿勢もそれによって大きく左右されるようになった。

しかしこの時期における現代アラブ研究および調査は50年代と比較して質・量ともに大きく前進した。それにしてもアラブ地域で次々と現れた政治的、社会的不安定および諸問題に対する危機意識は以前とほとんど変わらず薄いものでしかなかった。

日本国内においては、敗戦直後の混乱が徐々に収まり、1952年4月の独立と共に新しい時代を迎え始めた。敗戦国の日本は経済的な「離陸」をはじめた。そしてその数年後60年代に日本の産業ブームが起こり、それに伴って東アラブ諸国が日本にとって大切な燃料資源地域であると改めて認識されるようになったが、政治的な側面において、日本はできるだけ地域で起こっている諸事件に首を突っ込まないで、継続して一歩引いた付き合いをするような方式をとった。

1961年に東京外国語大学にはアラビア語・アラブ文学科が新設された。それと同時に大阪外国語大学のセム語学科の一科目であったアラビア語が独立しアラビア語学科が登場した。さらに、東海大学、天理大学、早稲田大学、慶應大学と拓殖大学などでアラビア語・アラブ文学の講座が次々と現れてきた。その他にも、「エジプト文化センター」、「日本サウジ友好協会」、「日本クウェート友好協会」で社会人向きの夜のアラビア語教室が設けられるようになった。

こうして日本におけるアラブ・イスラム研究が再び新しいブームを迎えた。日本の文部省、通産省、外務省並びに日本全国の企業の関係者がアラブ情勢の研究に関わっている諸研究所および調査プロジェクトのために財政上の資金を備え始めた。

60年代の半ば頃から70年代初頭まで日本におけるアラブ・イスラム研究の中心になった東京外国語大学での研究はアラビア語の文法とアラブ文学、特に近代イスラム思想に注目した。1964年に同大学に設立された「アジア・アフリカ言語文化研究所」はイスラム圏とアフリカ諸国の研究プロジェクトを実現させ

るための企画を持っていた。1967年に「アジアとアフリカにおける近代化とイスラム」というタイトルで共同研究プロジェクトが同研究所で実施された。そのプロジェクトの企画の一つとして、年に3回のシンポジウムが実施され、多くの大学の関係者がそれに招かれた。各シンポジウムは一つのテーマを取り上げて分析した。例えば、「西アジアおよび東南アジアにおける現代イスラム諸問題」、「中世イスラム史」、「アフリカにおけるイスラム」、「西アジアにおける土地制度と所有権について」、「イスラム思想と近代アラブ文学」などのテーマが取り上げられた。

「アジア・アフリカ言語文化研究所」は年に一回その年に行なわれたシンポジウムで発表された論文集を刊行した。その論文集のタイトルは「アジア・アフリカにおけるイスラムと近代化」であった。そのプロジェクトは七年続いたので、その結果、イスラム諸社会についての日本人の視点を表わす七つの論文集が発表された。さらに大阪外国語大学がアラビア語の文法と言語学に細心の注意を払っていたが、東京大学並びに京都大学は広い意味でのイスラム研究に注目した。東京大学に「東亜文化研究所」が、そして京都大学には「内陸アジア研究所」という二つの研究所が新設された。そして慶應大学に新設された「東洋文化研究所」が西アジア諸国の歴史と宗教の比較研究に注目していた。天理大学並びに大正大学の場合も同じ分野に興味を示した。

戦後日本のアラブ研究における第三の転換期は1970年代初頭から始まった。それまでは遠い存在の地域でしかなく、そこでの出来事が「他人事」だと思われてきた諸問題が一気に身近な問題として意識されるようになったのである。1973年10月の六日戦争（「第四次中東戦争」）とそれに伴った石油危機（日本の世論で「オイルショック」として知られている）の際に、アラブの指導者が石油問題と中東の和平問題とをリンクさせた形で日本を含む先進国に対アラブ政策、アラブ認識の透明さを迫ったのである。日本における石油危機のインパクトは他の先進国よりもはるかに深刻な問題であった。当時発表された経済開発協力機構（OECD）のレポートによると、日本で使用される資源のほとんどが海外からのものであり、特に石油の場合は他の先進国よりも、アラブからの石油に依存するところが大きいということが述べられている。当然の結果として第一次石油危機が日本の対アラブ政策に大きな修正をもたらすきっかけとなったし、アラブ・イスラエルの衝突に対する日本の政治的な姿勢を変えることになった。日本外交および企業関係者の中に、西洋のレンズを通してアラブを眺めるといった姿勢ではなく、相対的に独自の路線を目指す集団が形成されるようになった。そしてその時期に初めて石油問題と政治問題の一体化というアラブ問題の認識が定着した。つまり日本の経済的安全保障は中東和平と切り離して

考えることができないとする姿勢である。

この時期になると日本はすでに産業貿易立国という目的を果たし、国際社会で対外援助、協力、対外投資を行う経済大国として、位置付けられるようになった。アラブ地域に関しても、石油危機は政策上の意思表示を日本の利害の観点からと同時に、国際社会における大国の観点から提出することを要求する意味を持っていた。対アラブ認識における経済と政治問題の一体化認識の中で生れた新しい政策は主に二つの特徴を持っていた。まずこれまでと違って、日本の文化的、社会的背景に相応しい日本独自のアラブ政策を実施するということで、常に中東での政治的問題（特にパレスチナ解放戦争の進展）を重視するというもので、対外経済政策の重点を湾岸産油国、北アフリカ産油国そしてエジプトに絞るという特徴である。その結果として、アラブ世界に対する新しい接近法は、以前のように日本政府および民間企業に限られたことではなくなった。一般庶民もまたアラブ情勢に関心を抱き始めるようになったし、日本の大学のアラビア語学科を志願する学生数も増えつつあった。それに伴って日本中の出版社がアラブ現代史および文学、地理、社会などに関する多くの著書を発表するに至った。

第1次石油危機から第二次石油危機までの間、日本政府並びに民間企業に中東の情報を提供するべく60年代に設立された研究所の他に同じ目的のためにたくさんの研究所が新設された。例えば中東協力センター、中東経済研究所はその良い例であり、対外経済政策の実務に直結するような機関の新設もあった。

この時期に現れたアラブ関係の研究者は三つの種類に分けることができる。まず西洋においてアラビア語およびアラブ文学の研鑽を積んだ人たちであるが、彼らは西洋のアラブ研究の影響を受けながら、現代アラブ・ムスリム社会におけるネイティブの学者の研究を無視していたのである。中央大学の嶋田襄平氏がその派の代表的な存在で、他にも何人かの学者がいる。

二つ目は西洋の東洋アラブ学者の研究並びに現代アラブネイティブの研究者の研究に頼らず、日本独自のイスラム研究法を求めた人たちである。彼らはアラビア語原文の資料を取り上げるように努めながら、日本人独自の発想法や文化的背景に見合った日本独自の視点を取るようにした。東京外国語大学アラビア語学科の牧野信也氏がその派の代表者である。

三つ目は西洋での東洋学は帝国主義政策とのしがらみから生れたものであるというふうに捉えた。つまり西洋によって紹介されたアラブ・イスラムの社会像が必ずしも正確なものではないというのである。そのために西洋の学者の諸著書に頼らず、アラブ・イスラム諸国のネイティブの学者の経験を参照しながらできるだけ原文を取り上げるようにした。東京大学の板垣雄三氏、アジア・

アフリカ言語文化研究所の三木亘氏、並びにアジア経済研究所の中岡三益氏がその派の代表者で1973年以来その分野で大幅に貢献してきたと思われる。

1973年に学術的な研究機関も新設されるようになった。そして1960年代に設立されていた海外協力事業団、エネルギー研究所あるいはアジア・アフリカ言語文化研究所などの活動がいっそう整備された。

アラブにおける諸問題を取り上げるためにアジア経済研究所に研究プロジェクトが実施された。その企画の中で社会経済学および政治意義という分野に関する主な著書の翻訳および出版が進められた。そのプロジェクトの収穫として、アブドル・ラフマーン・アル・シャルカーウィの著書“al-ardh”の日本語版『大地』が奴田原睦明氏によって紹介されたし、タウフィーク・アルハキーム著の日本語版『意識の回復』が堀内勝によって現われた。そして最後に、ムハンマド・オーダ著の日本語版『失われた意識』が池田修によって登場した。

アラブ諸国における現状への研究関心（特にアラブ産油国）が増えつつあったにも関わらず、日本国内の大学、例えば、東京・慶應・京都大学の東洋研究科に設定された根本的なイスラム研究には変化がなく、設立当時とほぼ変わらない取り組み方であった。

結論

日本におけるアラブ研究は60年代以来、進められ、経済的、または政治的な状況の中で特に1973年10月の六日戦争の後で盛んになった。また現地調査も日常化した。その年は経済技術協力および日本アラブの相互理解の新時代を記録した年であった。そして、日本におけるアラブ研究の将来が期待できるようになった。しかしその反面、現代アラブ問題あるいは現代イスラム問題を日本人がどのように把握するのか、なぜ日本人にとって不可欠な課題であるのか、日本の置かれた状況から見直す作業がかえって色あせたかのように見える。経済的な面において、日本がアラブ石油に頼らざるを得なかったところが大きかったし、絶えず地域における政治的な問題に関わらなければならなかったこともあったが、それまでの日本アラブ関係を振り返ってみると、日本はできるだけ地域での政治的な情勢から身を引こうとしたことは明白な事実である。

戦前において、アラブ・イスラム研究は日本の軍事政府の政治的または経済的な政策と深く関わっていたし、戦後日本のアラブ関係にしても、常に日本は日本側の利害の観点からアラブ世界における諸事件を見る姿勢を取っていた。しかしこれから日本・アラブ関係を深めるのに今までのような一步下がっての

付き合いはあまり効果的ではないと思われる。つまり政治的および経済的な問題とのしがらみでの付き合いや、これまでのようなやり方、つまり何か大きな問題が起きてから慌ててそれにどのように対処したら良いかを考えるという付け焼刃の対応ではなく、日本における西洋研究、アジア研究のように常に関わりをもつことが必要である。政治家および知識人や大学関係者などの少数派に限っても、日本・アラブ関係では、常にその関わり方が表面的なところに止まってしまい、前に進んでいないように思われる。アラブ世界からの情報を日常化させメディアを通して日本社会に紹介することと西洋からの情報をそのまま鵜呑みにする前に正確さを確かめてみるのが、今後に望まれるところであろう。

参考文献

- 杉田英明（1995）『日本人の中東発見』 東京：東京大学出版会
- 歴史学研究会（1985）「アジア現代史」別巻「現代アジアへの視点」東京：青木書店
- （1980）Arab-Japanese Relations. Japan National Committee for study of Arab Japanese Relations. Tokyo Symposium
- （1982）Arab-Japanese Relations. Japan National Committee for study of Arab Japanese Relations. Mishima Symposium